慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	科学的社会主義は如何にして可能なりや（上）
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.7 (1924. 7) ,p.1050(140)- 1063(153)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240701-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

舊經濟組織より見れば晩期 Spätepoche なり。初期と晩期の間に、一經濟組織のみの精神が全發展を遂げたる隆盛期 Hochepoche は介在す。(S. 25-26. 第一版 S. 71)

而してゾムバルトは資本主義的經濟組織に於ける中心的動力にして、企業精神 Unternehmungs-Geist 及市民的精神 Bürgergeist より成れる資本主義的精神に就きては、本著に於て多くを論ずることなくして、其總べてを彼の別著 Der Bourgeois に讓れり。(S. 329)（完）

科學的社會主義は如何にして可能なりや（上）

平井新

本稿は Eduard Bernstein の著 Wie ist Wissenschaftlicher Sozialismus möglich? の翻譯である。本書は其著 [illegible] 諸文獻の中で最も [illegible] 文獻の [illegible]

約二十數年前即一九〇一年五月十一日ベルンシュタインが伯林社會科學研究會の席上述べた講演に多少の補正を加へて同年五月二十九日約五十頁の小冊子として公刊せしものである。本書は斯かる小著たるに拘らず、かのマルキシズム全體系に根本的斧鉞を加へた名著 „Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie." と共に „Revisionismus" の二大寶典として既にマルキシズムに關する歴史的古典的文献に屬するものである其立論の堂々、論理の明徹、批評の剴切犀利なる流石に匠匠の面影を躍如たらしむるものがある。乍去惜むらくは譯者の貧しき語學力のために原書の高雅なる氣品を傳え得ざりし事である。誤譯、誤字等、恐らく貧しき譯者の免かれぬ所であらう。願くば大方讀者の御教示を待つのみである。因に原著の脚註は飜譯の便宜上省略した。此點御諒承を乞ふ。

現今普及せる社會主義諸學説中、就中最大の勢力を有するもの即ちカルル・マルクス及びフリードリッヒ・エンゲルスに依つて完成せられた學説體系――今日各國多數の闘爭的社會主義者にして、天分の甚だ豊なる J. B. V. Schwitzer は、マルクスの主著『資本論』公刊の際、其讀後の所感を述べて謂ふ『社會主義は一個の科學である』と。

遮莫マルクス派社會主義――姑く此略稱を用ふれば――は自ら『科學的』と呼號した唯一の又は最初の社會主義學説ではない。佛蘭西の社會主義者ブルドンの一派ほど『科學』なる文字を振り廻はしたものはないとはマルクスさへも『資本論』の第一章脚註第二十四に書いてゐる。乍去ブルドンはマルクスが『資本論』を著した當時に於いて、羅甸民族社會主義者中最も深き感化を與へてゐた。試みに諸君がブルドン以前に現はれた佛蘭西の二派の社會主義者即ちフリエー並にサン・シモンの學派を覗ひ更に轉じて、英國に移り、ロバアト・オウエン學派の著作を繙くならば、諸君は屢〻彼等が一樣に『科學』なる名稱

を要求した事實に逢着するであらう。而して又ラッサッルレに於いても此要求は必ずしも存しないとは言へない。斯く觀じ來る時は、十九世紀の社會主義者は總じて、何等かの方法に於いて自家の學說の『科學』たるの權利を主張して止まなかつたと言ふも敢て過言ではあるまい。

一見した所では、此の符合は動もすれば吾人の疑惑を招く虞がある。併乍此等の諸學派の間には、その考察及び推理方法に於いて甚だ大なる差違の存する事は吾々の知れる所である。プリエー主義者に對するプルドンの論難攻擊が如何に辛辣を極め、マルクスの批判の笞が此プルドンを如何に强く擊ちし事よ！而もマルクス自身も亦屢、彼が他に對して爲したと同樣の批難――空想と形而上的概念の遊戯――を社會主義的批判家から蒙けた。最近の社會主義的マルクス批判家は姑く置くも、今日既に忘れられてゐるが併し當時可成の聲名を馳せ、且つ學識を有したる佛蘭西の一社會主義者 Paul Brousse は『空想主義』を以てマルクスを責め、彼に、最後の偉大なる空想主義者なる綽名を與えてゐる。斯の如く均しく皆科學なる名稱を求めてゐる社會主義者の間に大なる見解の相違が存在し、而も之等の相違が事實上單に外見上或は一時的適用に就いてのみならず亦多くの場合學說の根底に及ぶものとすれば――吾人は勢ひ、之等の社會主義者の主張は、必ずしも皆が正しいものではなく、又彼等の何人も自己の社會主義を科學的なりと稱する權利を有するものではないと言ふ事に想ひ到りはしないであらうか？

斯くて吾人が今之等社會主義の體系並に理論に關する爭論を止めて、今日之等諸學說中の勝利者たるマルキシズムの學說のみを窺ふ場合に於いてすらも吾人は猶一もすれば批判的資質を有する人々をも當惑せしむる諸點に邂逅する。

フリードリッヒ・エンゲルスが社會主義の科學性を二個の理論的見地より演釋し、その一つが餘剩價値說なることは吾人の既に述べた所である。エンゲルス謂えらく『支拂はれざる勞働の占有が資本主義的生產方法及び之に依つて行はるる勞働者搾取の根本的形態である。資本家は彼が勞働者の勞働力を市場に於いて、商品として價値全額を以て購買する場合に於いても尙之に對して支拂ひたるもの以上の價値を此の勞働力より抽出する。此餘剩價値こそは、究局に於いて、之に依り不斷に增加する資本量が所有階級の掌中に於いて絕えず蓄積される所の、價値總額を形成する。かくて資本主義的生產並に資本の生產の過程は說明された』と。

是に於いてか、吾人は動、もすれば社會主義の必然性は餘剩僧値の事實から演釋さる可きものであるが故に、此餘剩僧値の科學的證明と、社會主義との間には、密接な內面的交涉が當に存在す可きであると早斷するかも知れない。乍併吾人は此推定と相矛盾する幾多の章句を、マルクス及びエンゲルスに見出すことが出來る。その最も顯著なる言明はエンゲルスが一八八四年『哲學の貧困』の獨逸版にものした序文中に之を發見することが出來る。其所でエンゲルスは社會主義は餘剩價値の事實より科學的に演繹されるものとなす見解に斷乎として反對してゐる。彼はマルクスの言明を指示した後次の樣に說明してゐる。『此應用は、經濟學上、形式上謬つてゐる。蓋しそは單に經濟に對する道義の一適用に外ならぬからである。ブルジョワ經濟學の法則に從へば生產物の大部分はそれを造つた勞働者に歸屬しない、そこでそれは不當である當さに然る可からざることであると云へば、そ

れは差當り經濟とは全く關係のない事である。吾々は此の經濟的事實が吾々の道念と抵觸すると言ふに過ぎぬ。さればマルクスは未だ曾て其の共產主義的要求の根據を此に求めないで、吾人の目前に於いて日々完了に近づきつゝある資本的生產方法の必然的崩壞に之を求めたのである。彼れは一個の單純なる事實として餘剩價値は支拂はれざる勞働を以て成ると言つたに過ぎぬのである』と。

此章句は吾人が曩に引用した章句とは、其趣を全く異にしてゐる。即ち讀者は其所に、不可解なる論理的矛盾の存するものであるとの印象を受けるのである。即ち曩には餘剩價値は社會主義の科學的基礎の一なりとせられ、而もエンゲルスの記す所に據れば前記著作は之を印刷に附するに先つてマルクスに示し彼と充分議論し言はば、其贊同を得たも同樣のものである。然るに今、這個の餘剩價値說は社會主義のためには證明能力の無いものとせられてゐる。此事は上記二問題中の一問題に關して吾人から脚下の土を奪ひ去るものの如くに考へられる。

其處で最俊の引用章句に對するエンゲルスの言明の當否如何を爭ふ人があるかも知れない。尤もエンゲルス及びマルクスの思考方法に於けるより大いなる相違を確定せんとする試みが無いでもないが、之等の試は余の觀る所に據れば、多くは失敗に終つてゐるか左もなくば非常な誇張に失してゐる。勿論、エンゲルスが全然忠實なマルクスの解說者でなかつたと思はれる方面も無いではない。乍併此事は現在の場合に就ては當つてゐない。マルクス自身の各種の發言を綜合して觀ると、結局兩者の見解の全く同一であることを認める。エンゲルスが前記の個所に引用した章句はエンゲルスの解說とは全然異つた解釋の餘地を遺さないとも限らない樣に思はれる。乍併吾人が『一度資本論』を繙くと次の樣な事實を認める、即ち『勞働力――賃銀勞働者の――の使用に依つて日々生產される價値が勞働者自身の日々の價値の二倍であると言ふ事狀は、購買者たる資本家に取つては特殊の幸運であると共に販賣者たる勞働者に對しても決して不正とは云へない』と又マルクスの『ゴーダ綱領草案批評書簡』中には次の樣な意味の事が書いてある、即ち『それは――今日行はれてゐる勞働生產物の分配は今日の生產方法に基く唯一の公正なる分配ではないか？』と、又マルクスが完全なる共產主義社會以外の社會形態に於いては、凡て勞働報酬と勞働給付との間に分量的差別が存在すると言へる事に徵しても、吾人はエンゲルスの言明がマルクスの見解を正當に傳えたものであることを最早や疑ふ事は出來ない。

而も社會民主黨の通俗的文獻中にも、且つエンゲルスの著書並に彼及びマルクスの充分贊同を得た著作中にも、餘剩價値の事實が尙依然として社會主義の決定的議論として論ぜられ『資本論』に於いても餘剩價値は搾取なりと稱せられてゐる。――搾取とは、人間と人間との關係に關する所に於いては、常に倫理的非難を受く可き利用の意である、――掠奪と言ふ語との言語上の關係が此を指示してゐる通り――假面した盜掠である。かくて資本家は之を社會的――個人としてではなく――に觀れば勞働階級の盜賊であり吸血者であるとして現はれる。

今此の事實と前述エンゲルスの言明との關係は如何？之に關して吾人に指針を與えるものは前記エンゲルスの言明に續く次の章句である。即ち謂ふ爲併全經濟上、形式上謬つてゐること

も尙ほ世界史的に見れば必ずしも謬つてゐるとは言へない。大衆の倫理的意識が、嘗て奴隷制或は賦役の不正なりし經濟的事實を說明すると共にそは又、此の經濟的事實が既に陳腐のものとなり、之に代つて他の經濟的事實が現はれるに及び遂に保持す可からざるに到つた事實を物語るものである。かくの如く形式的經濟的不正の背後にも極めて眞實なる經濟的內容が潛在してゐるのである』と。

即ち社會の社會主義的變革の必然性を證するものは、餘剩價値の事實その者ではなくて、餘剩價値に對する大衆の憤激であるとされ、此の餘剩價値を以て搾取なりと看做す事が、既存社會秩序の保持す可からざる事の擧證とせられ、既存狀態の既に保持す可からざるに到りし事の指示器とされてゐる。乍去此不保持性の原因は餘剩價値占有の事實に求められる可きものではなく、寧ろ他の經濟的事實に之を求めなければならぬ。今此事に間違無くば余の觀る所に據れば、社會主義は餘剩價値の發見と共に科學となつたとの主張は當然蹉跌しなければならない事になる。彼等の業績其者が假令科學的に卓越せるものであつても、且つ理論的に、申分ないものであつても、前述の說明から觀察すると、這個の餘剩價値說は社會主義に對する一切の科學的證明力を喪つたものであると云ふ事が出來る。然りそは既存社會に對する科學的說明として最早妥當するものでは無い事、恰も奴隷勞働の場合に於いて、奴隷が自己の消費する以上のものを生產するとの發見が、奴隷制をその基礎とする社會秩序に對する科學的反證では無かつたと同樣である。

因に謂へば、餘剩價値の確定に關連して、マルクスの場合に發見なる字句を用ふることは大なる誤謬であると思はれる。餘剩價値の事實はマルクス以前に既に知られゐた事は一般に認められてゐる。餘剩價値の問題が、勞働者は既成生產物の市場價値と原料——生產要具の損料をも含む——との價格との全差額を賃銀として受取らないと言ふ事實の確定に關する限り、此の事實の發見は何等特殊の功績であるものとは思はれない。餘剩價値に關するマルクスの功績は寧ろ資本主義經濟に於ける餘剩價値生產の種類方法及び其の社會進化に及ぼす結果の曝露並に其深刻なる分析に存する。余の觀る所に據れば、吾人がマルクスの試みた餘剩價値の演繹を總ての點に於いて受容するや否やの問題は、之に關するマルクスの研究の大部分の認識價値と何等相關連するものではない。既にしてマルクスの餘剩價値說の出發點——價値の分析を時間に依つて測定される、人間的勞働に求める——を認めないで、寧ろ英塊學派の限界價値說に左袒する社會主義者の極めて多い事は周知の事實である。而も此れあるに拘らず、是等の社會主義者は今日勞働者が搾取され、且つ餘剩勞働給付の止むなき事實を認めてゐる、唯だ彼等は此の事實を、他の、彼等の見解に從へば、非形而上學的方法に依つて論證せんと欲するものである。然り或は搾取を論證するに際して、價値學說を引合に出す事を誤謬であるとなし、一切の價値學說を離れて、生產學說、餘剩生產より之を演繹せんとする人々すら存在する。其一例を擧ぐれば Antonio Graziadei（アンドニオ・グラヂアディ）教授の有名なる著作『La Produzione Capitalistica』の如き即ち之である。

併乍吾人は再び當面の論題に立歸つて、エンゲルスに倣ひ、餘剩價値に對する大衆の倫理的怨恨、餘剩價値を以つて搾取なりと看做す非難

――之等の裡に這個餘剰價値を基礎とする現存經濟秩序の存立を不可能ならしむ可き他の經濟的事實の根據を求めなければならぬ。此經濟的事實とは果して如何？

エンゲルスは前記の個所に說明して謂ふ『マルクスは其共產主義的要求の根據を吾人の目前において日々完了に近づきつゝある資本的生產方法の必然的崩壞に求めたのである』と。此見解即ち資本主義崩壞の事實より、社會主義を演繹せんとする事に關して、數年前社會民主黨の理論家の間に目醒しき論戰が交はされ、且つマルクス派の流を吸む人々の間に於いてすら尙著しき見解の相違の存する事は恐らく諸君周知の事實である。余自身又此論戰に參加したのであるから此論戰に就て此以上論及しない事にする、唯だ次の事實を示せばそれで充分である、即ち彼等の間に、此崩壞を如何に解す可きやに關して三個以上の見解の相違が存すること、且つ諸君が若し此誤讀されたエンゲルスの字句を一層精細に熟慮反覆する時は、容易にその眞意を了解されるであらうと云ふ事を。此の關係に於いて『必然的』の意味如何？資本主義生產方法の崩壞とは如何？此章句は吾人をして、不可避的經濟的崩壞、一大經濟的破裂、資本主義生產方法を基礎とする社會組織の一大崩壞の事實を想起せしめ、かくて、諸種の聯合を想起せしむる。今假りに此崩壞の必然性が論證されたにしても果して此事實は科學的に論證せられ得るものであるか？或は寧ろそは多かれ、少なかれ眞實と見ゆる一個の假說に過ぎないものではないか？更に、資本主義生產方法崩壞の事實より、社會主義の科學的必然性は生ずるものであるか？之等の諸問題は吾人が社會主義の科學性を確定せんとする場合に必ずその眞義を闡明して置かねばならぬ問題である。一切の歷史的經驗並に現在の諸現象の吾人に示證する所は資本主義生產方法が從來の生產方法と同樣に可變的であると言ふ事である。乍去吾人當面の問題は這個の終焉が果して崩壞に終るものなるや此崩壞は極めて近き將來に期待さる可きものなるや、並に之は必然に社會主義に導くものなるや否やと云ふ事である。此等の問題に對して社會主義者の與えたる解答は極めて多種多樣である。

此事實は社會主義者が社會主義の論證のために企てた各種の假說並に推論に關しても亦同樣である。余はラッサルレが其運動の根據とした賃銀鐵則の運命を想起する。惟ふに諸般の經濟學說中賃銀鐵則程熱烈の信仰を享たものは他に稀である。此法則は久しき間、近世勞働運動の標語であり、勞働運動の卓越せる、忠實なる鬪士の精神的力の源泉たる信條であつた。曾て余は斷乎として――無遠慮に言へば――聲明した、即ち斯の如き法則は存立するものではなく、その根據は非科學的である、當に該綱領より抹消せらる可きであると。余の聞知する所にして幸に謬無くば、當時此語法を承認す可きや否やに關して、多くの勇敢なる鬪士の間に內訌を惹き起した――乍併遂に承認さるるに到つた。今日此法則は既に征服せられたものゝ看做され且余の觀る所に由れば相當以上に征服せられてしまつた。そして今日最早何人も之を口にするものは無くなつた。吾人は更に貧困說と稱する見解――勞働者の經濟的地位は資本主義の發達に連れて必然的に劣惡となり、貧困となると言ふ見解――に就て考察して見度いと思ふ。此見解は曾て傳播せられ、且又一見科學的根據を有するかの樣に思はれた、――此の見解は『共產黨宣言』中に表明せられ、且又社會主義の初期時代

に反覆唱道せられた――併乍今日に於いては又既に拋棄されてしまつた。かくて工業及び農業の發達の並行、資本家階級の瓦壞並に勞働分化の廢止等に關する見解――即ち科學的根據を有すると看做されてゐる之等の學說は悉く誤謬に屬する――吾人は誇張の言を弄するものではないが――ものであり、纔に部分的眞理を有するに過ぎないものである。

遮莫部分的眞理は根本的誤謬より科學に對して却て一層大なる禍を齎らすものである。前述の如く吾人は、社會現象に對する代表的社會主義者の見解の變化――其れに依ればエンゲルスの所謂科學的社會主義の他の根據なる唯物史觀も亦其使命を盡してしまつたものである――に鑑るとき吾人は恐らく、社會主義の科學的破產の言葉に贊和せざるを得まい。今吾人は、一方實際的運動の方面に於いて、社會主義が不斷に吾人の目前に擡頭し、殆んど各國の社會黨が着々其成果を收め、勞働運動が漸次其地盤を獲得し、堅實にその特定目標に向つて邁進し、其要求を層一層明白に揭げて居るのを認めるに反し、他方科學の方面に於いて、社會主義はその理論のより大なる統一の代りに、分裂を蒙け、社會主義の理論的代表者の間には、信念の代りに、懷疑と散逸の度の漸次濃厚となりつつあるを認める。斯の如く一方が毫も他方を妨げるものに非ざることに鑑るとき、一般に社會主義と科學との間に果して密接なる內的關係の在存するや否や、科學的社會主義は果して可能なるや否や、更に科學的社會主義は一般に必然なるや否やの問題に逢着せざるを得なくなる。

乍併諸君は、此問題が今始めて提起されたものであると思つてはいけない。既に他の國々に於いて、卓越せる人々が之等の問題を研究し、講演者（余）も亦既に數年前此問題に多少乍ら論及した。乍併前述の如く此問題は遂に適切なる概括を得るには到らなかつた。

今此處に他の方面から一例を引くことを許して貰ひ度い。十八世紀の中頃、哲學の方面は眞に異說紛々たるの狀態であつて、諸思想家の眞意を解するに苦しむの有樣であつた。一七八一年ケーニスベルヒにカントは其純粹理性批判を以て現はれた。彼の第一の目的は、哲學の可能なる任務に對する自意識並に理性的思索の限界の認識を訓ふる事に存した。該書はその難解なる文體並序文のために殆んど理解されなかつたが故に、彼は一七八三年、其中心思想を、理解に容易なる形式で『科學として成立し得可き將來の形而上學入門』と題する小著の中に書き下ろした。本書に於いて、カントは、先づ必要なる說明を試みたる後、二個の問題を提起し之に對し犀利なる概急分析を以て答へた。第一の問題に曰く、形而上學一般は如何にして可能なるや第二に曰く、科學としての形而上學は如何にして可能なるや？と。余は信ず、大哲學者の這般の典型は、吾人が當面の問題に對し滿足す可き解釋に到達するために吾人の企つ可き究明に對して一個の指針を與ふるものであると。勿論吾人は單に盲從的に、カントと同樣の形式に依つて問題を提起せんとするものではない。否寧ろ吾人は吾人の問題とする對象の性質に問題を適應せしめなければならぬ。乍併吾人は又カントと同樣の批判的精神に倣つて、而も一切の理論的思惟の根底に流るる懷疑論並に總ての時代に存する獨斷論に、斷乎として向けられたと同一の精神に於いて、問題を提起しなければならない。吾人は社會主義對科學の關係を論ずる先つて不取敢、一般に社會主義とは何ぞやの問題を

闡明し、かくて、科學的社會主義は可能なるや、如何にして可能なるやの問題に移らなければならない。

社會主義とは何ぞや？此問題に對する解答は極めて多樣であるが、吾人の研究に重要なる關係あるものは特定の社會秩序の觀念に結び付いて居るもののみである。之等の解答は二種類に分別される。即ち或は謂ふ社會主義とは特定社會秩序の影像であり、觀念であり、學說であると。又或は謂ふ社會主義とは、特定社會秩序に對する運動であると。遮莫社會主義は、之を狀態と看做すも、學說と看做すも、或は又運動と看做すも、そは均しく理想主義的要素を包含することは疑ひない。此處に理想主義的要素とは卽ち或は理想其者の謂であり或は此理想に對する運動の謂である。社會主義は彼岸の一斷片である——併乍吾人　住する遊星の彼岸ではなく、吾人の實證的經驗世界の彼岸である。社會主義はある可き所のものであり、ある可き所のものに對する運動である。此事は保守的社會主義の系統に就ても同樣である。併吾人は今姑く之等の系統を觀察することを止める。蓋し之等は社會主義の名稱を唯誤謬に導くに過ぎないものであるから。若し吾人にして一切の概念上の混同を排除せんと欲するならば『社會主義』なる語を『社會』societas 卽ちGesellschaft なる曖昧なる概念に其語源を求めることを止めて『仲間』Socius 卽ち Genosse 或は『組合』Genossenschaft なる極めて特定せる概念に其語源を求めることを宜しとするものである如何なるものも『社會的』Gesellschaftlich であり得る、從つて此語に語源を求めるときは、『社會的』『社會主義的』等の概念は、寧ろ現今の社會主義勞働黨の要求と根本的に異り且つ之と相矛盾する諸般の努力に對しても此の言葉を用ひなければならない樣になる。併乍之等政黨の要求にして一つとして『組合』なる概念に適應しないものはない。余は曾て此意味に於いて、社會主義を以て組合主義に對する運動であるとなした、而して此處にも此意味に用ふるものである。

科學的社會主義とは社會主義的努力、社會主義的要求の確立であり、且つ之等の諸要求の根底に横はれる理論である。大衆現象としての勞働運動は之等理論の對象を形成するものであつて、此理論は這個の對象を理解し、說明し、擁護し且つ自らを闡明せんと企てるにも不拘、そは明かに、獨逸の農民戰爭佛蘭西革命及び他の歷史的鬪爭と同樣に科學的運動と稱することは出來ない。科學としての社會主義は認識を根據として其上に憑依する、運動としての社會主義は其の最も高尙なる動機として利害に依て導かれる——尤も此所に所謂利害とは排他的個人的即ち經濟的自利の謂でない事は言ふを俟たない、道德的利害（社會的感情）、理想主義的利害も存する。利害の存せざる處には何等の社會的行動は成立しない。認識は軈て利害を喚起し且つ之を指導する。乍去認識はそれが利害と結合し、之と融合するに到らざる限り、外部に對しては消極的である。一方、物質的或は觀念的利害は認識を促進し、認識の普及に役立つ、併し利害は、認識が利害の目的を督促し或は、少くとも之を妨害せざる場合にのみ、意識的に且つ有意的に之を爲すに過ぎない。之あるが故に認識當事者としての科學と、一切の政治的、經濟的、思索的利害との間に常に對立が可能となるのである。